

成分名	アプロチニン液
英 名	Aprotinin Solution
CAS No.	9087-70-1
収載公定書	局外規
A TOXNET DATABASE	https://chem.nlm.nih.gov/chemidplus/rn/9087-70-1

投与経路 その他の外用剤

用途 安定(化)剤

以下については該当文献なし

- 単回投与毒性
- 反復投与毒性
- 遺伝毒性
- 癌原性
- 生殖発生毒性
- 局所刺激性
- その他の毒性

■ ヒトにおける知見

① 止血用組織接着剤が臨床導入されて以来、その安全性に関心が持たれている。最もよく利用されているものは蛋白分解阻害剤アプロチニンであり、このものはフィブリン塊を安定化させる。アプロチニンには抗原性がある。一般的なアレルギー反応を呈する患者で外科手術後の?管を閉じるために注射したフィブリンシーラント(アプロチニン含有)に対し、再度曝露したアプロチニンによって発症した。血清学的検査でアプロチニンに対するIgE 及びIgG 抗体が認められた。1990 年から1998 年の間に用いられたフィブリンシーラント100 万件のうち5 件のアレルギー反応が報告されている。結論として、アプロチニンによる過敏反応の頻度は10 万件に対し0.5 件、重篤なものは10 万件に対し0.3 件と極めて稀ではあるが、数週間以内に繰り返しフィブリンシーラントを使用する場合には注意を要する。¹⁾ (Beierlein et al., 2000)

② アプロチニンのアナフィラキシー危険性について1963 年から2003 年の約40 年間の調査を行い、その危険性は再使用患者で約2.8%であった。アプロチニンによるアナフィラキシーは124 例について61 の文献に報告されており、この内11 名が死亡した。再投与が3 ヶ月以内に行われた患者は72%であった(53 名中37 名)。²⁾ (Beierlein et al., 2005)

引用文献

- 1) Bierlein W, Scheule AM, Antoniadis G, Braun C, Schosser R. An immediate, allergic skin reaction to aprotinin after reexposure to fibrin sealant. Transfusion 2000; 40(3): 302-5
- 2) Beierlein W, Scheule AM, Dietrich W, Ziemer G. Forty years of clinical aprotinin use: a review of 124 hypersensitivity reactions. Ann. Thorac. Surg.. 2005; 79(2): 741-8